

コミュニケーション能力は変えやすい能力。



人見知りをしなくなったのはいつからだろう。ある日、自分が人見知りでないことに、ふと気づいた。それまで、道端で知人を見かけても声はかけなかったし、集団でいるときも、なるべく一人でいた。

ある日、ラジオ番組のゲストに出たとき「人見知りなんです」と自分のことを説明していき、ふと恥ずかしさを覚えた。それがさも病気かのように、どうしようもないことのように語っている自分に少し苛立ちを感じた。

それまで、相手に好かれない、嫌われたくないという想いが強すぎて、コミュニケーションを取ることを放棄していた。コミュニケーションに失敗し、そこで人間関係を学び、成長する努力を怠っていた。

それを相手に「人見知りで」とさも被害者のように言うのは、「自分はコミュニケーションを取る努力をしない人間なので、そちら

で気を使ってください」と恐ろしく恥ずかしい宣言していることと同じだと思った。

数年前から、人見知りだと思ふことをやめた。心の扉は、常に鍵を開けておくようにした。好きな人には好きだと伝えるようにした。ウザがられても、嫌われても、その人のことが好きなら、そう思ふことをやめないようにした。それで思い出した。「お前ウザいよ」と言われた幼いあの日から、嫌われないように自分の性格を歪め、そもそも人間が好きではないと思おうとしていたが、僕は人が、人と接することが大好きだったのだ。

集団でわざわざ一人になる必要はなくなった。そもそもどんな人間も一人であり、だからこそ人は手を取り、コミュニケーションを交わすのだ。

「コミュ障」という言葉もけっこう一般的になって、初対面の人に「私、『コミュ障』なんです」（あるいは「人見知りなんです」）って言われる機会もあります。

僕もそんなことを口にしたことがあるんですよ。今から考えたら、若者にそう言われたら微笑ましくても、オッサンにそう宣言されても、どうしたら良いのか、と困惑されるだけだよなあ。

「コミュ障」という言葉のおかげで、人と接するのが苦手な人が、ある程度認知された、という感触はあるんですよ。ただ、そのことは「コミュ障の人々」を、そういう自分に安住させてしまっているのかもしれない。

「そういう人が大勢いるんだから、別にこのままでも良いよね」って。

もちろん、世の中には病的な「対人恐怖症」というのもあって、そうなる「なんで人と積極的にコミュニケーションをとろうとしないんだ！」と言うのではなく、ちゃんとした治療が必要なわけですが、実際は、「人と接するのに気を遣うのがめんどくさい人」が「コミュ障」という言葉に乗っかっているケースが多いように感じます。

そこまでして無理にコミュニケーションなんてとる必要はない、と決めてしまっているのならともかく、そういう人も、大部分は「もうちょっとうまくやれたらいいのに」って思っているのではないのでしょうか。

採用学』（服部泰宏著・新潮新書）という、企業の「採用する側」からみた「採用のノウハウ」を検証した本のなかに、こんな話が出てきます。

私たちが持っている能力は「極めて簡単に変わるもの」と、「非常に変わりにくいもの」の二つがある。（中略）

ここで注目したいのは、多くの日本企業が採用基準として設定している口頭でのコミュニケーションが「比較的簡単に変化」する能力としてあげられていることだ。

先に紹介した経団連の「新卒採用に関するアンケート調査」によれば、日本企業の実に %以上が、口頭でのコミュニケーション能力を、自社の選考の際に重視する基準としてあげている。日本の面接が、いかにこれを重視して構成されているかということがわかる。

ところが心理学の世界では、これが相当程度可変的なものであり、意図的な努力によって向上するものであることが指摘されているのだ。

大学○年生の時には、人の目を見て話すことすらまならなかった学生が、卒業する頃には他人とのコミュニケーションにすっかり慣れて、立派にプレゼンテーションをこなしたりするなど、私たちの日常的な経験に照らし合わせても、この主張には納得がいく。

この話の論旨は、「後天的に改善しやすい『コミュニケーション能力』というのを、採用時にそんなに重視すべきなのか？」ということなのですが、言われてみると「大学デビュー」「社会人デビュー」なんて周囲から揶揄される、すっかりチャラくなってしまった友人を思い出す人も少なくないはず。

「チャライ」と言えば印象が悪くなるけれど、他人に接する態度というのは、環境や本人の努力によって、変えられる（あるいは「変わる」）ことが多いのです。

「比較的容易に変えられる能力」であり、「本当は改善したいと思っている人がたくさんいる」にもかかわらず、「コミュ障」というのが一般化し、自他ともに「そういう人もいるから、仕方ないね」と認めてしまうのは、必ずしも良いことばかりではないと思います。

「コミュ障」は、けっして、克服できないものではないし、むしろ「コミュニケーション能力というのは、努力が実を結びやすい分野」であるというのは、知っていて損はしないはず。

出典 <http://blog.tinect.jp/?p=38854>

■ 変わりやすいもの

- ・ リスク志向性
- ・ 知識や技術
- ・ 教育の水準
- ・ 仕事経験
- ・ 自己に対する認識
- ・ コミュニケーション

- ・第一印象
 - ・顧客志向
 - ・コーチング能力
 - ・目標設定
 - ・エンパワーメント
- 変わることはわかるが、変わりにくいもの
- ・判断能力
 - ・戦略的スキル
 - ・ストレスマネジメント
 - ・適応力
 - ・傾聴
 - ・チームプレー
 - ・交渉スキル
 - ・チームビルディング
 - ・変革のリーダーシップ
 - ・コンフリクトマネジメント
- 変わりにくいもの
- ・知能
 - ・創造性
 - ・概念的な能力
 - ・部下の鼓舞
 - ・エネルギー
 - ・情熱
 - ・野心
 - ・粘り強さ

会社の人事部で働いている人の意見

某社の人事を統括なさっているHさんに、先日お話を伺った際には、Hさんの組織では、「変わりにくいもの」は「ものごとを徹底する力」である、と考えておられました（貴重なお話をありがとうございます！）。だから採用の際には「これを見る」そうです。

そういえば、先だってお逢いした某社の営業役員の方は、

「やらないやならないこと、ついつい、先延ばししちゃう傾向」

だけは、いくら口を酸っぱくしても変わらないよ、とおっしゃっていました。含蓄のある言葉です（感謝です）。

今、ある講座を受講してくださっている女性のHさんは、

「採用後に何とかできるんで、うちでは、採用時には、コミュニケーション能力は見ません」

とおっしゃられていました（貴重な情報を感謝です！）。

- ・ 出典 <http://www.nakahara-lab.net/blog/archive/3147>